

事務室をすぐ出て、寒い、シトシト雨のプラットフォームで各停を待っていると、しぶきを上げて、特急と急行が相次ぎ、通過した。各停は、なかなか来ない。その時だった。

冬の近畿大会の帰りに、この駅まで、帰りが一緒だった女の子の事を思い出した。風で黒髪がなびいていた後ろ姿は今でも印象強い。その時だった。のろのろと各停が入って来て、停車した。ドアが開き、乗ろうとしたら、ガヤガヤと数人の女生徒と一緒に、話しながら、髪の毛の長い彼女が降りた。僕には気が付かない様だったが、僕は驚き、そのまま目で追った。電車はドアがしまりかけた時、急に彼女は、はっと気が付き、僕の方を振り向いて、フォームに立ち止まった。その瞬間、ドアが締まり、電車はフォームを離れて行った。フォームに立つ彼女の姿が暗闇の中に小さく消えて行くのが、電車のドアごしから見えた。ほんの一瞬の出来事だった。

家に着くとすぐ、下のコタツに入り込み、寝てしまう。しかし、しばらくして起き上がり、再び、自分の部屋に入り、夢想到にふけているうちに、また眠ってしまう。

英語会話のテープはまだ来ない。一体、何をしているのだろう、もう来そうなものなのに。

目が覚めたら一時で、部屋のあかりに気付き、母が下で呼ぶ。寿司があり、それを食べて、カステラ、チョコレイトをペロリと食べて、部屋にもどり、また、寝てしまう。

兄貴の試験結果はまだまだ先だが、気になり、僕も落ち着かない。勉強すべきと思えど、明日があると、何もしたくない気持ち。

何もしたくない気持